



vol.  
158

今月のお題  
.....

## 天文学を楽しむ場

星ナビは、天文ファンが集まる「場」。天プラも、そんな場の創出に違う形で取り組んできました。今回はそのおさらい。

高梨直統 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台チリ観測所)



天プラの出発点かつ今に至るまで看板を務めてくれる孝行もの、ATP。

星ナビ200号おめでとうございます。折々の宇宙に触れる場を提供し続けてくださることに、一天文ファンとして感謝しています。そしてこのコラムも気づけば158回。星ナビ全体の3/4ほどをご一緒にしていることとなります。ここでは、天プラが実験的に作ってきた、「天文学を楽しむ場」や構想中のアイデアなどについて紹介させていただいてきました。

このコラムの初回、2004年6月号のタイトルは「ひと味違った宇宙の楽しみ方を伝えたい」でした。今や天プラの看板商品となった「アストロノミカルトイレトペーパー(ATP)」もまだ構想段階だったころ。天文学を研究する大学院生とプラネタリウムをつないでユニークな天文普及活動をやろう、というのが天プラの原点でした。その後、「場」はプラネタリウムを飛び出し、美術館、小学校のクラブ活動、飛行場、都心のビルの屋上、津波被災地、自動車やマンションのショールー

ム、博多の屋台など大きく展開しました。その気になれば、天文学や宇宙が日常生活と交差する場はたくさん作れるのだ、というのが実感です。

天プラでは、専門性を大事にしています。私たちは天文学の専門家ですが、異なる専門性を持つ方々と手をつなぐことで、企画の魅力は大きく高まります。天文学以外の学問の専門性はもちろん、たくさんの人を集めるための専門性、逆に特定の人にしっかり届ける専門性など、いろいろな切り口があります。まずはその企画で対象にしたい人たちを確かに把握し、それに沿った専門性を持つ方たちとつながるのです。例えば小さい子を持つ親世代向けの天文教室では、託児サービスと協力したように。逆に、ある専門性を持った人たちと一緒に企画することになった場合には、互いの強みを活かせる対象を設定するということもあります。

さて、天プラは次はどこへ向かうのでしょうか。ヒントは対話にあるかもしれません。一方的に天文学を解説するのではなく、対話の中から新しい視点を掘り出していくのです。ひとりひとりが持つさまざまな社会経験や哲学も、言ってみれば専門性。地球外知的生命の存在や関わり方、現代社会において宇宙を考えることの意義など、天文学だけでは紐解くことのできないテーマはいくらでもあります。たくさんの対話を重ねていろいろな考え方を消化し、それを新しい企画につなげていく。今後もどんな「場」が作れるか、ぜひご期待ください。